

Title	吐魯番出土文物研究会會報 第108号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会會報. 108 p.1-p.8
Issue Date	1996-01-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78919
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

1996年1月1日
吐魯番出土文物研究会

■ 目 次 ■

〈翻 訳〉何 故 契 約 文 書 を 墳 墓 に 埋 納 し た の か……………Valerie Hansen 著	1
本間 寛之 訳注	

何 故 契 約 文 書 を 墳 墓 に 埋 納 し た の か

Valerie Hansen 著
本間 寛之 訳注

【解 題】

本稿は、Valerie Hansen 女士が漢語で発表された論文「為甚麼將契約埋在墳墓裡？」を、女士の了解を得て日本語に訳出したものである。アメリカ・エール大学歴史学部の副教授である女士は、以前京都大学に留学したこともあり、日本にも知己が多いが、昨年9月、武漢大学を会場に開かれた中国唐史学会国際学術研討会に北京滞在中の女士が提出したのが、この論文である。私は宋代史を主たる専門とする女士とはこの武漢の学会が初対面であったが、武漢滞在中にこの論文に接し、対象や分析の方法に、日本や中国の研究には見られない新しさを感じた。そこで帰国後、女士に論文の訳出と会報への掲載を依頼したところ、快諾の上、学会に提出したものをさらに補訂した原稿を早速送っていただいた。そこで早稲田大学の大学院でトゥルファン文書を研究している本間寛之氏に翻訳をお願いし、さらに本間氏の訳稿を会員の荒川正晴氏が校定してここに掲載することになったしだいである。

著者である Hansen 女士、ならびに翻訳にたずさわった本間氏には、あらためて謝意を表したい。

なお女士には、トゥルファン出土文物も駆使した大著“Negotiating Daily Life in Traditional China—How Ordinary People Used Contracts 600—1400”, Yale Univ. Press, 1995 がある。

(關尾記)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【凡 例】

㊦は原注を示し、※は訳注を示す。原注の中でも※以下は訳者による補足部分である。又、著者原稿では文書の録文を改行していないが、本紙での例により訳者の責任で、『吐魯番出土文書』によって改行し、文字も一部改めた。録文の〔〕内は『吐魯番出土文書』で示された、音通仮借の場合の本字を表し、() 内は筆者の考えによる音通仮借の本字を示す。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【本文】

紀元673年、左憧憲と呼ばれる高利貸がこの世を去った。彼の墓はアスターナ墓地にあり、1964年、その墓が発掘された時、15件の契約文書が墓内より発見された②1。最古のものは660年、新しいものは670年の文書である。一般に、アスターナから出土した契約文書は、切断して、死者の紙靴に加工してから墓室内に納められたものだが、左憧憲の契約文書はそれとは異なって切断加工を全くしない姿でまとめて巻かれており、故意に墓室内に置かれたもののようである。左憧憲或いは彼の親族は、どうしてこれらの契約文書を墓室内に埋納しなければならなかったのだろうか？他の人々も契約文書を墓室内に納めようとしたのだろうか？筆者がここ5年間、契約文書を研究してきた際に収集した資料を用いて、この問題に本稿で回答を出してみたい②2。

上述の契約文書の他、左憧憲の墓からは墓誌銘が1方出土している②3。墓誌銘によれば、死亡当時、彼は57歳の戍衛（国境守備の兵士。戍守。一訳者注）であった※1。他のアスターナの墳墓と同じく、左憧憲の墓からは衣物疏1件も見付かっており、以下の内容が見られる②4。

- 4.（前略）左郎隨身去日、將
5. 白銀錢參所・白練壹万段・清科 [= 稗]・□麦・粟・床
6. 等伍万石。（後略）

奴婢6人も陪葬されている※2。左憧憲の墓である4号墓の発掘報告はまだ発表されていないので、この目録の内容と墓内の物品との間に如何なる関係があるのかは不明だが、衣物疏の出土したアスターナの他の墳墓からは、紙或いは布で作った小さな模倣銭や布を象った模型も出土している。従って、そのようなものが左憧憲の墳墓にも埋納されていたかもしれない。同衣物疏は続けて以下の様に記す。

- 7.（前略）咸亨四年四月廿九日付曹主左□
8. 校收取錢財及練・伍穀・麥・粟等所研 [= 斛] 收
9. 領取用。鎧 [= ?] 有於人、不得拽取。付主左
10. 憧憲收領。

最後の一文は極めて正確な表現であり、死者左憧憲はこの目録の内容を確実に自分のものとしていた。呉震先生の御教示によれば、この衣物疏は巻かれてから、左憧憲の衣服の中に入れられていたのだから。

衣物疏が冥界で用いるための文書であることは明白であるが、では、問題の15件の契約文書も同様であったのだろうか。

これら15件の契約文書は巻かれてから、死者の腋の下に置かれていたので②5、これらの文書もまた故意に墓内に納められたことになる。これらの契約文書は現世の人間世界では明らかに何らの用途も持たない。そうでなければ、左憧憲は契約文書を子孫に伝えねばならないが、中には契約が既に満期となっているものもある。あらゆる租田契約は一定の期間に限って有効であって、その時期が過ぎれば失効する。出土した15件中5件の契約文書は左憧憲が土地を借りる内容だが、どれも期限を過ぎている。一方、物品や奴婢の売買契約では土地貸借と異なって、買い取った後も契約文書は残して、所有権の証明とする。左憧憲墓中の2件の文書がこの類に属し、661年に15歳の奴隷を買った契約と、668年に90包の草を買った契約とがある。契約文書には更にもう1種あって、これは期限が無く、貸し手は銀錢や布を他人に貸し、同時に契約文書を1通作る。錢或いは布が完全に返還されたら、貸し手は借り手に契約文書を返す、というものである。しかし、左憧憲の墳墓内からは錢・布を他人に貸す契約文書が8件出土している。それらによると、660年に銀錢10文を貸し、以下、661年に練30匹、

665年に練3疋、同じく665年に銀錢48文、666年に銀錢10文、668年に銀錢20文、670年には2回、銀錢40文と銀錢10文を貸していることが判る⑥6。この8件の契約では完済されていないことが明白である。

上に挙げた15件中、3件の契約文書が左憧憲と張善憲という農民との間のものである※3。668年に左憧憲は張善憲に銀錢20文を貸し、張善憲は毎月2文の利息を支払うことを承知した。毎月1割の利率であり、当時のトゥルファンで広く通用していた利率に相当した。この契約は3月に結ばれたもので、冬の蓄えが尽き、収穫はまだない時期である。2年後の契約文書は左憧憲が張善憲の田を借りる内容である。毎年2回、左憧憲は田租を払い、契約中の規定によれば、4年目には左憧憲は30文を支払わねばならない。この契約が結ばれた1ヶ月後に、張善憲はまた錢40文を借りている。ここから、我々は左憧憲は土地貸借に名を借りて張善憲の返済の妨害をしたと推測できる。そして、3件の契約から、張善憲の左憧憲に対する借金は、ますます増えていった、という印象を受ける。

さて、左憧憲は金持ちの様なのに、何故張善憲の土地を借りる必要があったのか。彼は張善憲の如何なる所有物をも買えた筈である。しかし、均田法では土地の購入は許されない。ここで、左憧憲の墓から出土した興味深い文書がもう1件あり、それによると、668年、左憧憲は別のある人物の葡萄園を自分に給付するよう申請している⑥7。左憧憲が張善憲の土地を借りたのは、彼がこの種の方法で自らの資産を拡大しようとしたからである。

ところで、左憧憲の契約文書が冥界で如何なる用途を持っていたのか、未だ不明であるが、伴出した左憧憲への手紙1件は、我々に示唆を与えてくれる⑥8。

1. 乾封二年膺月十一日、左憧憲家内失銀錢伍伯（＝佰）
2. 文、盜〔＝道〕漢舍盜錢。其漢舍不得兄子錢、家里
3. 大小曹主及奴是等及鎧（＝外）相有人盜錢者、兄子
4. 好驗校分明索〔＝索〕取、里鎧有人取者、放令
5. 漢舍知見。其漢舍好兄子邊受之往〔＝枉〕
6. 罪。漢舍未服、語兄分明驗校。漢舍心下
7. 得清淨意。古〔＝故〕若漢舍不取之錢、家里曹主及
8. 大小奴婢及鎧人放、漢舍眼見、即於死者咸亨四
9. 年四月廿九日神遇已後、見多放任、即須知錢
10. 之住、要須大小得死、漢舍即知。

漢舍の文章がぎこちないため、この手紙はなかなか分かりにくい。漢舍は、彼自身が完全には理解していない言語で書いたのだろうか。手紙は書き終えた後、折畳まれ、外側にまた多少の文言が書かれた。しかしながら、手紙の原状保存には注意が払われてこなかったため、我々は何と書いてあるのか知りえないが、大体において、これは漢舍が左憧憲に書き送った手紙であり、他人は見えてはならない、という意味のことが書いてある※4。

この手紙には、金銭盗難事件に対する漢舍の見解が述べられている。左憧憲は漢舍が金を盗んだと疑っていたため、漢舍は左憧憲（曹主一訳者注）の家を離れざるをえなかったが、彼は自分は無罪であると主張し続けた。漢舍は手紙の中で、左憧憲が冥界で真犯人を見つけるに違いないと信じる、と述べる一方、自分が無罪であるとする主張をも書いている。もし漢舍が冥界の正義を信じていたのなら、どうして更にそのような手紙を書かねばならなかったのだろうか。彼は左憧憲（曹主一著者原注）が真犯人を捜し出すに違いないと述べているが、ではどのような状況下で、或いはどんな法廷で探し出さうかは述べていないのである。

この問題に関連するものに、アスターナから出土した別種の契約文書があり、これは死後の世界で

用いられるものである。769年に游撃將軍張無価が現世を去った時、彼の官告と以下に掲げる契約文書が、胸の上に広げて置かれた。伴出したその契約文書は以下の通り⑨。

1. 維大曆四年歲次己酉、十二月乙未朔、廿日
2. 甲寅、西州天山縣南陽張府君張無
3. 價俱城安宅兆、以今年歲月隱便、今龜
4. 筮協從、相地襲吉、宜於州城前庭縣界西北
5. 角之原、安厝宅兆。謹用五綵雜信、買地一
6. 畝：東至青龍、西至白虎、南至朱雀、北至玄武。
7. 内方勾陳、分掌四域。丘承〔＝丞〕墓伯、封步累
8. 畔。道路將軍、慙〔＝整〕齊阡陌。千秋萬歲、永無咎
9. 殃。若輒干犯訶禁者、將軍庭帳收付河伯。
10. 今已牲牢酒飯、百味香新、共爲信契。安厝已
11. 後、永保休吉。知見人：歲月主者。保人：今日直符。
12. 故氣耶〔＝邪〕精、不得忤擾；先來居、永避萬里。若
13. 違此約、地府玄里自當禍、主人内外安吉。
14. 急急如律令。

この文書では土地の買い手・見人・保人の名前と土地の四至、そして地価（五綵雜信）を記しているが、売り主の名前は見えない。現世の土地契約の多くも同様であった。最後の一段では他の死者並びに生者が墳墓を侵すことに警告を発している。文書の背面には片側しか残っていない4文字「へき」が書かれている。彼ら契約の当事者は、何故文書の裏に文字を書く必要があったのだろうか。

この問題に答えるために、ここで張無価の契約と類似した43件の契約文書を検討せねばならない※5。張無価のものが最古であり、新しいものは20世紀にまで至る。これらの契約文書は皆ある程度、宋代（1071年）の陰陽書『地理新書』所載の契約と似たところがある。『地理新書』の序文には、本書は前代の書を引用している、と書かれているから、張無価の買地券も陰陽書から写されたのだろうと推測できる。『地理新書』所載の買地券は張無価のものとはやや異なっており、以下の通り⑩。

某年月日、具官封姓名、以某年月日歿故、龜筮協從、相地襲吉、宜於某州、某縣、某鄉、某原、安厝宅兆。謹用錢九萬九千九百九十九貫文、兼五綵信幣、買地一段、東西若干步、南北若干步、東至青龍、西至白虎、南至朱雀、北至玄武。内方勾陳、分掌四域。丘丞墓伯、封部界畔。道路將軍、整齊阡陌。千秋萬歲、永無殃咎。若輒干犯訶禁者、將軍亭長收付河伯。

合以牲牢酒飯、百味香新、共爲信契。財地交相、分付工匠修營、安厝已後、永保休吉。

知見人：歲月主。

保人：今日直符。

故氣邪精、不得忤慙；先有居者、永避萬里。若違此約、地府主吏自當其禍、主人内外存亡、悉皆安吉。急急如五帝使者女青律令。

張無価の契約文書は『地理新書』所載の契約と大同小異であるが、しかしその「小異」の部分は検討するに値する。唐代における地価は「五綵雜信」であるが、宋代では「五綵信幣」に「九萬九千九百九十九貫文」の「錢」が加わる。この数字は、この「錢」が冥錢であって本物の貨幣ではないことを示しており、このような数字を選択した主な理由は、被葬者が富裕であったことを表わそうとしたからである。「九」には二つの意味がある。第一に、「九」は「久」と同音である。そこでこの錢は永久の存在となる。第二に、3かける3もまた「九」である。「三」は非常に陽の性質の強い数であるが、「九」もまたそうなのである。多くの買地券はみな、こうした「錢九萬九千九百九十九」という錢額を載せるが、この変化は中国経済の貨幣経済化という現象を反映している。また、『地理新書』所載の契約では、墓地の具体的な面積（「東西若干歩、南北若干歩」）が加わっている。宋・元代の土地契約はそれ以前の契約に比べかなり詳しく、どれも具体的な言い方で四至を記している。

張無価の契約文書では、最後に「急急如律令」という一文がある。Anna Seidel（阿拿賽德爾）がかつて解釈したように、この言い方は漢代の文献に見るものと同じであり、本契約は当時のあらゆる法律規定（律と令を含む）に一致しているべきである、という意味である^{⑩11}。この一文はなかなか興味深い。死者と関係するどんな法律があったのだろうか。『地理新書』所載の契約では、最後に「五帝使者女青律令」という法律の名称を記している。女青は五方の皇帝の官僚であり、「女青律令」の施行も担当していた。『道蔵』は5世紀の『女青鬼律』という書を書せているが、後世には所謂「女青鬼律」の定義は拡大した。この言葉は『道蔵』中の書物を指すのではなく、死者に関するあらゆる法律を指すようになったのである。

『地理新書』には買地券の全文が掲載されている。同書が読者に、どのようにして正確な葬儀を行なうかを教えるものだからである。死者の親族は買地券を2通作らねばならない。1通は墳墓上の明堂に置かれ、もう1通は棺の前に置かれる。喪家は死者に与える靴・錢・紙・筆・墨を準備する。紙錢と紙で作った布は神に捧げられる。葬儀が終ると、祭官は2枚の買地券を取り出して喪家に読み聞かせ、それから2通は並べて置かれ、裏側の合せ目に「合同」という2文字を書く。こうすれば、後に2通の買地券が符合するかどうかを確定できるのである。これは古代の券契を作る方法を模倣したもので、張無価の買地券背面の文字も大体同じ用途のものであろう。そして最後に、『地理新書』の記載によれば、2通の買地券は「其の一は明堂位心に埋め、其の一は穴中の柩前に置きて之を埋む（其一埋於明堂位心、其一置穴中柩前埋之）」^{⑩12}、つまり1通は死者に、1通は土神に捧げられたのである。

江西省分宜県で出土した、『地理新書』を参照して書かれた買地券（1199年）では、買地券1通は太上老君に、1通は死者に捧げられると説明してある^{⑩13}。

（前略）切慮地中或有五方無道鬼神、妄有侵占。奉太上老君敕給地券一所、與亡人冥中自執爲照。如有此色、即仰立墳太神收押赴蒿里所司、准太上老君敕斬之。（後略）

江西省鄱陽県の明代の官吏の墳墓から出土した、『地理新書』によって作られた買地券（1454年）には以下のような記載がある^{⑩14}。

（前略）自葬之後、仰煩東嶽城隍、本境里社土地、長風水龍神、毋得阻當穴道等因。如有此等、仰周寛・田氏妙貞宜人、一同執此地契碑牌、徑赴三天門下陳告、依女青天律施行、須至出給者、右給付武徳將軍周寛、贈宜人田氏妙貞神主。（後略）

以上に掲げた2件の買地券は、重要でありながら『地理新書』には載っていない情報を我々にもたらししてくれる。死者が自分の買地券を所持しなかった理由は、万一、後からやってきた別の死者が冥界の法廷で死者を訴えた場合に、自ら携えている買地券によって、墓地が盗んだものでな

く、合法的に購入したものであることを証明できるからである。また買地券は、全ての手続きが完璧に行なわれたことをも証明する。現世の官僚と同様に、太上老君にもその分の買地券が1通必要であった。こうして、もし死者が裁判で争うようになった時には、太上老君は買地券を参考資料とすることができたのである。

買地券を墳墓内に埋めてはじめて、死者と買地券が共に冥界に行き、冥界の法廷に訴えるのを遺族は保証できた。買地券は現世では用途を持たず、冥界でこそ役立ったのである。

ところで逆に、死者はどうして現世の契約をも冥界に持っていかねばならなかったのだろうか。左憧憲はどうして15件の契約文書を自らの墳墓内に入れさせたのだろうか。洪邁の著した『夷堅志』には、この問題に関係する部分がある④15。南宋初年、寧波に住む夏主簿という人物が、富民の林なる者を告訴した。しかし、林が官吏に賄賂を贈ったため、夏は反対に牢に入れられた。後に病のために出獄したが、死ぬ間際に息子に言う：「我冤を抱きて以て歿す。凡そ向來の撲坊公帖並びに諸人負課契約は、盡く棺中に納むべし。將に地獄に於いて力訴せん（我抱冤以歿。凡向來撲坊公帖并諸人負課契約、盡可納棺中、將力訴於地獄）」と。

夏主簿は自分の棺の中に入れた文献は全て冥界に移動し、冥界の法廷で林を訴えるのに用いることが可能だ、と信じていた。このような信仰は普遍的に存在し、契約文書を自分の墳墓の中に埋めた人は多い。左憧憲も同様の信仰を持っており、漢舎も直接は言っていないが、自分は無罪であると左憧憲に主張した手紙を、冥界の法官が見るものと信じていた。漢舎は、冥界の法廷が犯人を捜し出すに違いないと信じる、と主張しているのである（但し筆者個人としては、漢舎が泥棒でないかどうかについては尚疑問を持っている一筆者原注）。

左憧憲が15件の契約を自分の墳墓内に埋めさせたのも、同様の信仰からであったわけだが、ではどうしてこの15件を選んだのだろうか。それは、これら15件の契約が未解決だったからに他ならない。左憧憲は、未返済の銀錢や練は冥界でも使えると信じ、冥界でそれらの負債者達を捜そうと考えていたのである。負債者達は既に死亡していた可能性が高い。そうでなければ、左憧憲の子孫が現世で彼らを告訴できるが、彼らがもうこの世にいないとなれば、左憧憲があの世で彼らを捜すほかないからである。また、左憧憲が土地を借用した契約も、冥界での自分の資産の拡大に利用できるものだし、張善憲のように立場が弱い人物の土地を何とか手に入れる手段にすることもできよう。しかし、奴隷を購入した契約文書と草を買った契約文書については、容易には解釈しがたい。左憧憲はまだ奴隷と草を手に入れていなかったのかもしれないし、手に入れたものの何らかの支障を発見したのかもしれない。或いは彼の買った奴隷は既に死亡しており、現世での売買契約に基いて、あの世での奴隷の彼への帰属を証明しようとした可能性もある④16。これらの契約文書はそれぞれ契約する物件の種類が異なっているが、一つの共通点が見出せる。現世では無用の契約文書だが冥界では用途がある、ということである。今のところ、その背景を説明するに足る材料が無いので、その用途を確実に明らかにするのは難しいが。

以上をまとめると、墓内に納められた契約文書には2種あった。一つは、生前と死後を通じて用いられるものである。左憧憲と夏主簿の契約は、現世で未解決だった訴訟と関係があり、死者はこれらの契約文書に基づいて死後も訴え続けようとした。もう一つは、張無価の買地券と『地理新書』所載の買地券のように、死後はじめて用いられるものである。死者は必ず冥界の法廷にいく筈であり、そこで現世の文献を基に主張を証明できる筈だと信じていた。それゆえ、彼らは契約文書を墓室内に納めたのである。

【原 注】※以下は訳者の補足。

- ④1……アスターナ4号墓の発掘報告が未発表のため、筆者は出土した文献しか見ることができず、その他の文物は見る術が無いが、両名の研究者から筆者に4号墓に関する情報を御教示賜った。武漢大学歴史系の朱雷先生には、1991年に香港で幾つかの文献を見せて

いただいた。新疆ウイグル自治区博物館の呉震先生からは1994年、ウルムチで4号墓の原状を説明していただいた。文章の手直しでは鄧小南氏の御協力を得た。諸氏の御協力によって本論文が完成したのであり、ここに感謝の意を表する次第です。

- ㊥2……拙著：“Negotiating Daily Life in Traditional China—How Ordinary People Used Contracts, 600—1400 (『古代中国の日常生活：老百姓怎麼樣用契約, 600年—1400年／※古代中国の日常生活：庶民は如何に契約を用いたか, 600年—1400年』)”, Yale University Press (耶魯大學出版社／エール大学出版社), 1995年
- ㊥3……張蔭才：「吐魯番阿斯塔那左憧憲墓出土的幾件唐代文書」：『文物』1973年第10期 1973年10月 pp.73～80 ※また周紹良主編：『唐代墓誌彙編』上 上海古籍出版社 1992年 p.571 所載の 咸亨084「西州高昌縣人左（憧憲）公墓誌」、ならびに穆舜英・王炳華主編：『隋唐五代墓誌匯編 新疆卷』天津古籍出版社 1991年 p.173 所載の「左憧憲墓誌」、および侯燦：「解放後新出吐魯番墓誌錄」（北京大学中国中古史研究中心編：『敦煌吐魯番文獻研究論集』第五輯 北京大学出版社 1990年 所収）p.603 所載の 録注123「唐咸亨4年（673）左憧憲墓誌」を参照。
- ㊥4……『吐魯番出土文書』第6冊 文物出版社 1985年 pp.402～403（※『吐魯番出土文書』図版釈文対照本 第参冊 文物出版社 1996年 ではp.208。以下、「対照本第参冊」と略称。） ※64TAM4：29（a）「唐咸亨4年（公元673年）左憧憲生前功德及隨身錢物疏」。尚、第10行で「憧憲」が「憧憲」となっているが、写真では「憲」字ともとれる。
- ㊥5……武漢大學歴史系の陳国燦先生による。
- ㊥6……『吐魯番出土文書』第6冊 文物出版社 1985年 pp.401～442（※対照本第参冊 p.208～229）とYamamoto Tatsuro & Ikeda On (ed.): “Tun-huang and Turfan Documents Concerning Social and Economic History” Volume III. Contracts (A) Introduction and Texts, THE TOYO BUNKO (東洋文庫), 1987年 ※pp.12～13・pp.24～29・p.51・pp.53～55 に4号墓の契約文書を全て載せる。 ※土地貸借の文書は、
- ・64TAM4：42「唐龍朔元年（公元661年）左憧憲夏菜園契」（152「唐龍朔元年（661）九月十四日崇化鄉左憧憲夏菜園契」）
 - ・64TAM4：43「唐乾封元年（公元666年）左憧憲夏田契」（158）
 - ・64TAM4：45「唐乾封元年（公元666年）左憧憲夏葡萄園契」（159「唐乾封元年（666）八月七日左憧憲夏蒲桃園契」）
 - ・64TAM4：33「唐總章三年（公元670年）左憧憲夏菜園契」（161「唐總章三年（670）二月十三日崇化鄉左憧憲夏田契」）と
 - ・64TAM4：51,52「唐麟德某年（公元664～665年）左憧憲殘契」（75「唐麟德某年（664～665）崇化鄉左憧憲〔拳錢？〕契」）の5件のことと思われる。売買文書は、
 - ・64TAM4：44「唐龍朔元年（公元661年）左憧憲買奴契」（25「唐龍朔元年（661）五月廿三日前庭府衛士左憧憲買奴契」）
 - ・64TAM4：32「唐總章元年（公元668年）左憧憲買草契」（28「唐總章元年（公元668年）六月三日崇化鄉左憧憲買草契」）の2件である。布錢貸借文書8件は、
 - ・64TAM4：38「唐顯慶五年（公元660年）張利富拳錢契」（68「唐顯慶五年（660）三月十八日天山縣南平鄉人張利富拳錢契」）
 - ・64TAM4：34「唐龍朔元年（公元661年）龍惠奴拳練契」（69「唐龍朔元年（661）安西鄉竜惠奴拳練契」）
 - ・64TAM4：36「唐麟德二年（公元665年）趙醜胡貨練契」（73「唐麟德二年（665）八月十五日西域道征人趙醜胡拳練契」）
 - ・64TAM4：53「唐麟德二年（公元665年）張海歆白懷洛貨銀錢契」（74「唐麟德二年（665）十一月廿四日前庭府衛士張海歆及白懷洛貨錢契」）
 - ・64TAM4：39「唐乾封元年（公元666年）鄭海石拳銀錢契」（76「唐乾封元年（666）崇化鄉鄭海石拳錢契」）
 - ・64TAM4：40「唐乾封三年（公元668年）張善憲拳錢契」（77「唐乾封三年（668）三月三日武城鄉張善憲拳錢契」）
 - ・64TAM4：41「唐總章三年（公元670年）張善憲拳錢契」（78「唐總章三年（670）三月十三日武城鄉張善憲貨錢契」）
 - ・64TAM4：37「唐總章三年（公元670年）白懷洛拳錢契」（79「唐總章三年（670）三月廿一日順義鄉白懷洛拳錢契」）である。尚、括弧内には“Tun-huang and Turfan Documents”における番号と文書名に相違がある場合の名称を付した。
- ㊥7……『吐魯番出土文書』第6冊 文物出版社 1985年 p.426（※対照本第参冊 p.221） ※64TAM4：6「唐總章元年（公元668年）西州高昌縣左憧憲辭為租佃葡萄園事」
- ㊥8……『吐魯番出土文書』第6冊 文物出版社 1985年 pp.441～442（※対照本第参冊 p.229） ※64TAM4：35（a）,（b）「唐漢舍告死者左憧憲書為左憧憲家失銀錢事」
- ㊥9……『吐魯番出土文書』第10冊 文物出版社 1991年 pp.6～7 ※73TAM506：05／2（a）「唐大曆四年（公元769年）張無價買陰宅地契」 ※尚、Yamamoto Tatsuro & Ikeda On (ed.): “Tun-huang and Turfan Documents Concerning Social and

Economic History”Volume III.Contracts (A) Introduction and Texts, THE TOYO BUNKO (東洋文庫), 1987年 p.15 では、34「唐大歴四年(769)十二月廿日天山県張無価買地券」。

- ⑩……王洙等撰『地理新書』卷14 斬草建旆 12丁；本文で引用した『地理新書』は北京図書館蔵の清影抄金刻本であり、北京図書館善本室のコピーを提供して下さった王小江先生に感謝します。『地理新書』は1985年台北で再版(『図解校正地理新書』※国立中央図書館蔵善本影抄金明昌3年本の影印。集立書局発行。こちらでは該当部分は13丁。)。拙稿：「宋代的買地券」(『国際宋史研討会論文選集』保定 河北大学出版社 1992年 pp.133~149所収) 参照。
- ⑪……Anna Seidel (阿拿賽德爾)：“Traces of Han Religion in Funeral Texts Found in Tombs (「從漢代的鎮墓券看民間宗教／漢代の鎮墓券に見える民間信仰」)”(『道教と宗教文化』平河出版社 1987年 pp.21~57 所収。邦文要旨あり。) p.30 参照。
- ⑫……王洙等撰『地理新書』卷14 斬草建旆 12丁 ※著者原稿には「柩埋之」とあるが、台湾影印版『図解校正地理新書』では「前」字が入っている。6行前の本文でも「棺の前」とあり、整合性を考えて著者原稿の誤りと判断した。
- ⑬……陳柏泉：『江西出土墓誌選編』南昌 江西教育出版社 1991年 pp.564~565 ※17「宋・彭氏念一娘地券」
- ⑭……陳柏泉：『江西出土墓誌選編』南昌 江西教育出版社 1991年 pp.585~587 ※39「明・周寛与田氏地券」
- ⑮……洪邁：『夷堅志』支戊卷5「劉元八郎」明文書局(台北) 1994年排印本 pp.1086~1088
- ⑯……廈門大学歴史系の楊際平氏の意見による。

【訳 注】

- ※1……著者原稿では「戍衛」だが、③に示す張蔭才氏論文や『唐代墓誌彙編』では「戎衛(唐代の軍隊の名称。龍朔2年改称設置、咸亨元年復旧。禁衛の兵。一訳者注)」となっている。写真でもやはり「戎衛」と解説でき、張蔭才氏は「前庭府衛士」であることを言うところと解釈しているが、「戍」を「戎」の如く書く例も木簡等に見られることもあり(佐野光一編『木簡字典』雄山閣 1985年 pp.320~321 参照)、原稿を尊重した。因みに気賀沢保規氏は「戎衛」と訳読している。気賀沢保規：「唐代西州(吐魯番)における府兵の位置について」(昭和63年度科学研究費補助金総合研究(A)報告書[研究課題番号62301048]『中国辺境社会の歴史的研究』京都 出版社不明 1989年 研究代表者：谷川道雄 pp.54~62所収) 参照。
- ※2……同衣物疏16~7(⑩4参照)。しかし、実際には奴婢の遺体が発見されていないので、これも衣物疏の文面の上でのことであろう。荒川正晴：「阿斯塔那古墳群墳墓一覽表(その1)」(『吐魯番出土文物研究会会報』第8号 1989.3.1 所収 合本集録：『吐魯番出土文物研究情報集録—吐魯番出土文物研究会会報 1-50号—』pp.35~40所収) 参照。
- ※3……3件の契約文書とは、
- ・64TAM4: 40「唐乾封三年(公元668年)張善憲舉錢契」(77「唐乾封三年(668)三月三日武城郷張善憲舉錢契」)
 - ・64TAM4: 33「唐總章三年(公元670年)左憧憲夏菜園契」(161「唐總章三年(670)二月十三日崇化郷左憧憲夏田契」)
 - ・64TAM4: 41「唐總章三年(公元670年)張善憲舉錢契」(78「唐總章三年(670)三月十三日武城郷張善憲貨錢契」)である(出典は⑩6参照)。括弧内は“Tun-huang and Turfan Documents”における番号と文書名。
- ※4……64TAM4: 35 (b)；『吐魯番出土文書』第6冊 文物出版社 1985年 p.442(※対照本第參冊 p.229) であるが、同書による釈文は以下、このみ縦書きにして示す通り。

1 唐總章三年(公元670年)張善憲舉錢契
2 唐總章三年(公元670年)左憧憲夏菜園契
3 唐總章三年(公元670年)張善憲舉錢契

- ※5……ここに著者のいう43件の契約文書が、具体的に何を指しているのかは未詳である。

(完)

事務局(連絡先) 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424 (81) 4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)